

2020年11月15日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 柴川久仁子

奏楽 鬼頭容子

前 奏

招 詞 フィリピの信徒への手紙 第3章20節

讃美歌 讃美歌21-352 (来たれ全能の主)

交 読 詩編 第86篇 (p. 94)

祈 禱

聖 書 マルコによる福音書 第12章41~44節

(新約聖書 p. 88)

讃美歌 讃美歌21-343 (聖霊よ、降りて)

説 教 「献げる生き方」

教会の暦では11月22日、つまり次の日曜日が一年最後の日曜日となり、29日からアドヴェントが始まります。一年の終わりを意識するこの時に、み言葉としてわたしたちに与えら

れているのは、レプトン二枚の献げものをしたやもめの物語です。そしてこの小さなひとつの物語は、繰り返しわたしたちが心に留め、その意味を尋ねて神さまのみこころを聴き取るのにふさわしいものだと思います。

マルコによる福音書は、「レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランス」と細かく書いています。レプトンは当時パレスチナで使われていた貨幣で一番小さい貨幣ですが、クアドランスはローマの銅貨になります。そしてレプトンというのは、もともとギリシャ語ですから、それをもうひとつ、ローマの人たちが分かるようにラテン語の単位に置き換えると、クアドランスになります。そんなふうに丁寧にユダヤのことを伝えているマルコが、ここでは献金の様子がどうであったとか、こうであったとか、イエスさまは献金の内容がよくお分かりになったというようなことについては、何も説明しません。そんなことは説明する必要もない、とっていたかのようです。イエスさまが、わたしたちの献金の態度や内容について、よくお分かりに

なるというのは当然のことと置いていたのかもしれない。

このやもめの物語は、マルコによる福音書が書かれた頃、当時の教会で、絶えず語られ、語り伝えられていた言葉です。どこで語り伝えたかという、当時の教会の礼拝においてです。献げものをする、その場所においてです。そこでイエスさまがお褒めになった献金をしたやもめがいたのだという話を、何度も聞かされる。それは何のためかと言えば、わたしたちの礼拝を守る姿勢、わたしたちがする献金の姿勢のお手本としてです。そのお手本になる礼拝者の、その先頭にこのやもめがいます。だから礼拝をし、献金をするたびに、イエスさまがお褒めになったような、やもめの献金を真似ているだろうかと思自らに問うただろうと思います。

その礼拝において、わたしたちは主イエスを礼拝します。わたしたちはイエスさまを仰ぎ見て、そのイエスさまがわたしたちを見ていてくださることを改めて知ります。その主の

まなざしの下で、この物語をしている時に、このマルコによる福音書を書いた人も、これを伝えた人たちも、イエスさまが、皆のことを知っていてくださるのは当たり前ではないかと思っ
ていたのです。とても不思議なことにちがいないけれど、それは当然のことではないか。だから、説明の必要がないのです。

「見る」という言葉は、福音書が、書かれた元の言葉の中にもいろいろあります。たとえば、この後に続く第13章の1節にある、「先生、御覧下さい」という言葉や、「これらの大きな建物を見ているのか」という文章にある、「見る」を意味する言葉は、皆それぞれに違う言葉です。この41節では「群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた」と訳されています。この「見ておられた」という言葉は、珍しい言葉ではないようですが、特別な意味を持っています。たとえば、ある学者が自然現象（カミナリなど）をじっと観察します。そして、この自然現象には、こういう法則があるという理論を立てます。理論のことを英語でセオリーといいます。この言葉の語源になったギリ

シャ語が、ここで「見る」と訳されている言葉です。理論というのは、ただ頭の中だけで考え出すものではなくて、事柄をじっと観察するところから生まれてくるものです。あるいはまた、観客が芝居を観る。その場合の「観る」というもの、ここで使われている言葉で言い表します。ここから生まれた言葉が、わたしたちが日常の中で聞くことのある、シアターという言葉です。シアターもセオリーも、元は同じ言葉から出ています。ですから、集中して観察する学者のように、あるいはまた芝居に心を注いで、じっとそこへ溶け込むようにして観ている観客のように、イエスさまが、わたしたちの礼拝をじっと見ていて下さる。もっと言えば、さらに深く関わって、見ていて下さると言うことができます。

礼拝の中で司会者が祈る、その祈りの中で、「すべてのことから解き放たれて」との祈りの言葉を聞くことがあります。ここにいろいろな意味を見ることができます。これを言い換えれば、主のまなざしの中だけに自分を置くということです。今日

わたしたちはやもめの献げものに心を注いでいますが、たとえば献金をするというのは、その主のまなざしの中ですることであって、他の人の目の中で、なされることではないということです。ただ時に残念なことに、わたしたちは他人の目を意識することがあります。そうではなく、一切のまなざしから解き放たれて、けれど、主イエスのまなざしがじっと見ている下さる場所で、わたしたちの行いが、生き方が問われる。このやもめは、知らずして、その主のまなざしの中で生きていた人だということです。

今日、本当はその直前の 38 節から読むことが望ましいのですが、そこには律法学者の、人のまなざしを恐れて歩き回っている姿との対比が見事に現れています。そしてもう一つは、44 節に続いて第 13 章の 2 節までを一緒に聞く方がいいかもしれません。そこには、イエスさまの別の目が光っているからです。当時のエルサレムの神殿は、とても壮観壮大なものであって、今日からすると、想像もつかないほどだったといわれま

す。弟子たちはその神殿の壮大さに圧倒されて、何とすばらしい建物、何とすばらしい石だろうかと言いました。けれど、イエスさまは、この大きな建物をよく見てごらん、やがて崩れる。そう言われました。実際に、イエスさまが、これを語られてから30年か40年ぐらいたってからでしょうか、エルサレムの神殿は、まさに、ほとんど跡を残さずに崩壊して、今に至っています。

そうするとまたそこで問う人がいます。このやもめはレプトン銅貨二枚、一所懸命、自分の持ち物すべてを献げたけれど、いったい、それは何のためだったのか。結局は、滅びてしまう神殿のため、もっと言えば、偽りの礼拝が行われているような、そんな神殿のための献げものだったのではないか。イエスさまは、どうしてそれを問題にしないのか。どうして、もっと立派な目的のために、献げものがなされることをお勧めにならなかったのだろうか。

このやもめの献げものについては、そんなふうに問いを出すとすれば、まだ他にも問いがあります。このやもめは、生活費全部を入れたとあります。しかも、これが、わたしたちの献金のお手本だとされます。そうすると、いったいわたしたちの誰が、生活費全部を献げるだろうか。もしそうなら、このやもめの献金は非現実的ですし、結局はわたしたちのお手本にはならないのではないか。そこでも、わたしたちの問いが新しく生まれます。ただ、こう考えていいだろうと思います。いったい、お金とは何でしょうか。お金は永遠のいのちを贖うものではありません。たとえば数年前、わたしたちはこの教会を改築するのに献金しました。この建物を神さまにお献げしました。いろいろ制限があるなかで、それでも良いものができたと思っています。けれど、どんなに良い建物であっても、永久に保存できるものとは誰も思っていない筈です。やがては、いつかは再び建て直されるべき時も来ると思います。それなら、エルサレムの神殿と同じようなものに献金を献げただけでしょうか。けれど、わたしたちはいつでも、この地上にあって、すべてそ

のような意味において、やがて滅ぶわざのためにお金を用いています。家庭の営みもそうです。どんなことでも、永遠に存続することは約束されてはいません。

そこで改めて思います。ここでイエスさまが、この神殿が祈りの家であることをお求めになった時、この神殿を<まことの祈りの家>として重んじているのが、律法学者や祭司長でもなく、弟子たちでもなく、このやもめであることに、深い喜びを感じておられたのではないのでしょうか。いずれ滅びる神殿において、なおここで、真実の祈りをしているこのやもめがいるということ、それをイエスさまは喜ばれました。しかも、そのやもめの祈りは、何によって言い表されたのか。献げたのは「生活費全部」だとあります。このやもめが、毎日やって来て、自分の持っている財産を全部献げたわけではないと思います。それでは、食べていけなくなります。イエスさまはそういうことを求めておられないと思います。イエスさまは、食べていけなくなる人の悩みを知っておられましたから、パンもない

魚もないところで、パンも魚も奇跡によって生み出し、与えて
くださいました。やもめや、わたしたちから、生活の糧すべて
を取り上げるようなことをなさるわけではないはずです。

ではいったい、イエスさまはここで何を褒めておられる
のでしょうか。「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏し
い中から自分の持っている物すべて、生活費を全部入れたから
である」とあります。この「乏しい中から」というのは、乏し
いけれど、それでもせめて幾らかはある、その中から、という
ものではありません。欠乏そのものを意味する言葉です。何に
も無いのです。それなのに献げたのです。必要な物が、欠けて
いるところから献げたというのです。金持ちはたくさん持って
いる。一万タラントンでも、いくらでも持っている。その中か
ら献げる。それに対して、やもめは、たったの二レプトンとい
う僅かではあるけれど、それでもプラスの財産を持っている。
それは、とても小さくて僅かなものだけれど、それでも値打ち
を持っている。それを献げたのだと読むことができますが、実

際は、そうではなくて、無いのです。欠けているのです。マイナスです。ゼロ以下です。そういう意味の言葉です。

「生活費」となっているのは、その通りです。けれど、この言葉本来の意味は、「生活」「いのちそのもの」を意味していました。「日々のいのち」と言ってもいい。その自分の「日々の生活」、その「いのちそのもの」を神さまの前に、献げものとして置いてしまったというのです。どうしてそんなことができたのだろうか。さきほど欠けている、マイナスと言いましたが、それは言い換えれば、誰かに支えられなければ、生きていくことができないということです。僅かでも、自立するということではなく、相手を信頼して、その相手に委ねなければ生きていくことができないということです。だからここでは、この女性は、神さまに対する信頼を、その自分の存在のすべてを、そこに置くことによって明らかにしました。

ここまでに、律法学者とイエスさまとの間に、対話が続

けられてきました。その中でも、一番輝いているのは、ある律法学者が戒めの中で一番大事なことは何かということについて、イエスさまと語り合っていることです。そこで明らかになったのは、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くしてあなたの神である主を愛しなさい」ということでした。そうすると、この言葉が、ここでひとつの具体的な姿を表したということができます。やもめは神さまを愛しました。神を信頼して愛するということはこういうことだということを、わたしたちの先頭に立って、して見せてくれています。すべてを委ねるということ。愛するということは、愛してくださっている方の手に、自分を委ねるということです。

もちろんこの女性は、自分はすべてを神さまに献げたのだから、子どもにもこころを向けないし、子どもを養うために全力を注がないで、この世を忘れたような生き方をした人ではありません。そうではなくて、ここで自分の生活すべてを神さまに委ねるような思いに生きた人であれば、なお養わなければ

ならない子どもがいたら、親がいたら、まさにそのために「自分を愛するように隣人を愛する」ことにも、生きた人だったはずです。そうでなければ、イエスさまがお褒めになるはずはありません。

欠けているのはみんな欠けています。神さまの愛なしには、生きていくことができないという欠乏状態にあるのはわたしたち皆です。そういう人間が、そこで、神の愛の中に生きている時に、神に対する愛を、精一杯の思いをもって言い表すのが献金であり、イエスさまは金額を問うておられるのではありません。他の何も問われない。問われるのは、そこに注ぎ込まれる愛です。

まもなく一年が終わります。そして新しい年、アドヴェントを迎えるわたしたちにとって、この神に向かう心を示す物語を、このやもめの姿を通して思い浮かべながら礼拝することができるのを、大きな恵みとして感謝したいのです。今年がそう

報 告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。
主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>